

特集：育て！天文学者の卵たち — 研究機関が行う体験事業

特集記事によせて～巻頭言にかえて

近年、大学や研究所といった研究機関のパブリックアウトリーチとして、さまざまな教育事業が開催される例が増えてきている。その多くは、ひろく一般を対象とした公開講座、施設公開といったとりくみであり、講演会に代表されるような受動的なものが中心である。しかし、一部では、参加対象を若い世代に絞り、且つ、参加型・体験型の実習事業も登場するようになってきた。参加者にとって、単に、「聴く」・「見る」といった受動的なスタイルではなく、「手を動かす」・「考える」・「議論する」という能動的スタイル、そして、ときには苦痛を伴いながら体力と知力の限界（と言ったら大袈裟だろうか）を感じながらの体験型の事業である。それはまさに、数日間という短い期間ではあっても、研究者の日常が凝縮されている疑似研究体験という新しいスタイルの事業である。

この特集でとりあげたのは、いずれも中学・高校生を対象に、研究者側がとりくんでいる体験型教育事業の3つの例—「銀河学校」（1998年より：東京大学天文学教育研究センター木曾観測所主催）、「君が天文学者になる4日間」（1999年より：国立天文台三鷹主催）、「ジュニアセッション」（2000年より：日本天文学会主催）—である。いずれも、天文学研究の疑似体験であるばかりでなく、参加者と研究者とのふれあいを重視し、研究現場の空気を肌で感じられるリアリティ溢れる企画である。また、毎年継続・恒例化し、過去に多数送り出した卒業生たちが大学に入学し、現在、研究の道を歩み始めているという特徴を持っている。手探りの中で育てた第1世代のヒナたちが巣立ち、そして巣立った者たちが次の世代を育む時期にさしかかっている。そのような共通点をこの3つの事業は持っている。

今回は、3つの事例の紹介にとどまらず、それぞれの卒業生（大学生）からの生の声も添えることができた。それは決して誇張ではない、“科学のおもしろさ”の体験を渴望する声に違いない。この特集記事を通じて、未来の科学者・天文学者を研究の現場にいる者が育んでいくことの意義を考えていただければと思う。

なお、この他にも同様の体験事業が研究機関・公開天文台等でも多く実施されていることは承知しているが、それらの紹介はまた別の機会に譲りたく思う。

（編集委員・小野智子）